

訪問日：2017.8.22 / エリア：京都



めくるめく紙芝居

回答者 木暮 宜雄さん(京都橋大学現代ビジネス学部教授)

大学の企画としての活動経緯

もともと京都橋大学は女子大で、私は文化政策学部でアートマネジメントを教えていました。学部長から何か学外企画をしてくださいと話があり、女子大ということもあって、若手の女性のアーティストとアートマネージャーが集まって何かやろうと思いました。1年目はダンス+音楽+上田假奈代さんのパフォーマンスアート、2年目は現代アートの展示、3年目は暮らしに着目して、大学周辺の竹など自然を利用した生活アート、4年目に移動する芸術としてチンドン屋をしました。チンドン屋では、山科音頭を復活させました。

5年目に入ったときに、まちかど芸術をすることになり、演劇を見せながら、移動して、大学に到着するアイデアが出てきました。移動すると言えば、他には紙芝居かなと話が進みました。地域の子どもと、認知症などを患う高齢者と、NPO 法人わくわくの運営する太陽クラブというサークルに通う知的障害のある人たちと一緒に、演劇・紙芝居で一つの作品を作り上演することにしました。フェスティバルゲートの中にあつた「むすび」で紙芝居をやっていたアーティストの林加奈さん、コーディネーターの井手上春香さんとの話の中で流れが決まっていきました。

運営は行政からの補助金と、大学の予算でまかっています。最近では学部が文化政策学科から現代ビジネス学部が変わってしまつて、学生のアートへの興味も薄れがちです。学生からの参加者はほとんどいなくなっています。

昔は教育と地域連携の両輪で成り立っていた活動で、そこから公共政策を考えたり、学生の卒論のテーマになったりしていました。

紙芝居とアートの関係性

紙芝居は、何かに特化しにくい人でも挑戦できる、自由度が高いアートです。面白いメディアだと思ひ、その企画を継続していくことにしました。歴史的にも紙芝居というのは、専門家でない人が行ひ、専門家でない人が見る芸術である、限界芸術の実践だと思っています。やっていることを訳の分からないものにするというのが実はテーマです。難しく言えば、人の創発性(emergence)を探る活動です。

コミュニティの形成とまでは行きませんが、異なる人たちの共生の間だと思っています。継続していることで、障害のある人の楽しみが増えたというふうには思ひます。めくるめく紙芝居をはじめた林さんは、アートは世界平和だと言ひています。だから本当は学生にも来てほしいです。

参加してもらふアーティストにとつても、めくるめく紙芝居は社会を知るといふ機会になると思ひています。関西のアーティストの活動を支援することも目的です。

活動継続への課題

参加者は、大体 15 から 20 名ぐらいで NPO 法人わくわくのグループホームメンバーが参加することが多いです。林さんと学生と障害のある人たちで紙芝居にする話を考えていきます。テーマを決めて書いた絵をバラバラにして、話を作ったりしてきました。最近では、障害のある人がテーマを持てきます。例えば、仕事で少し嫌なことがあつた人が、それぞれの参加者の配役割振りを紙に書いてきてアルプスの少女ハイジをやりたいと言ひるので、やるしかなくなり皆でやってみたり。公演の日なのに小道具を忘れてきたから、観客とその場でワークショップをして道具を作つて、上演にこぎつけたり。訳分からない感じでやっています。

2006年より一人芸を起源とする「紙芝居」を起点としつつ、障害のある人もアーティストも、学生やまちの人も一緒になって、美術工芸や音楽ダンス、コントなどの要素を取り入れた作品づくりを行う。山科地区で誰でも参加できるワークショップを継続・展開している。

紙芝居を作るワークショップを月に大体1回はして、1年に1回は発表します。活動の拠点である京都市山科青少年活動センターのお祭り、「やませいまつり」で発表の機会があることが、活動のモチベーションになっています。

活動に参加している障害のある人たちは、40代ぐらいに年齢が上がってきました。めくるめく紙芝居をはじめた当初は、ものすごい喧嘩をする人もいましたが、年齢が上がってきて、今はそういうこともないです。ヘルパーさんの参加者の中でも、ヘルパーを辞めた後も通ってくる人もいます。場が開いているから、行こうかなという居場所になっているようです。

参加者の年齢が上がっていくことで、活動場所の青少年センターが利用しにくい気持ちもあります。また新しい参加者が入りにくい、学生とマッチングすることが難しくなっています。

今後は、例えば山科で子ども食堂が増えているので、そういった地域の他の団体と協力して何かできるかもしれません。

行政に求めること

広報で活動を取り上げてもらうなどすると嬉しいです。福祉とアートというのは、一緒なようで、行政のポジションとしてはかなり離れているはず。双方が交流して一緒に何かしてもらえると、福祉とアートの交差する環境を用意できるようになっていくのではないのでしょうか。